石上神宮の祭神

石上神宮は、複数の神道の神々が祀られている。日本の歴史を通じて、神の保護と崇敬は、国家の繁栄と安全に極めて重要であると考えられてきた。

主祭神

布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）

布都御魂剣に宿る霊力を体現する神。布都御魂剣は、武甕槌大神（たけみかづちのおおかみ）が所持していたもので、神話上の初代天皇である神武天皇に授けられた。死の淵にあった神武は剣の力によって回復し、神武は後に日本となる王権を築いた。

布留御魂大神（ふるのみたまのおおかみ）

天津神と呼ばれる天の神々が持つ十種の神器「十種神宝（とくさのかんだから）」に宿る回復の力を体現する神。この神器は、邇芸速日命（にぎはやひのみこと）（右参照）に授けられたもので、「御魂振り」の神事（鎮魂祭）の中心である。

布都斯魂大神（ふつしみたまのおおかみ）

嵐の神、素戔嗚尊（すさのおのみこと）が振るった神剣「天十握剣（あめのとつかのつるぎ）」に宿る霊力を体現する神。古代の神話では、どのように素戔嗚尊がこの剣で、恐ろしい八つの頭を持つ蛇である八岐大蛇を退治したかが伝えられている。

配神

宇摩志麻遅命（うましまじのみこと）

宇摩志麻遅命は、石船に乗って天降った邇芸速日命（にぎはやひのみこと）の子である。父から十種神宝（とくさのかんだから）を授けられた宇摩志麻遅命は、後に石上神宮で知られるようになる「魂振り」の儀式を神武天皇に指導したと伝えられている。宇摩志麻遅命は、物部氏の氏神であり創始者でもあるとされており、この神社と深いつながりがある。

五十瓊敷命（いにしきのみこと）

垂仁天皇の皇子であり景行天皇の弟である五十瓊敷入彦の神格化された御霊で、父親から石上神宮に祀る 1,000 本の剣を作るよう命じられたという。五十瓊敷は後に神宮の宝殿の蔵人となった。

白河天皇

石上神宮に深い崇敬を示した白河天皇（1053-1129）の神霊。1081 年、白河天皇は現在の拝殿を寄進した（p.XX）。

市川臣命（いちかわおみのみこと）

孝昭天皇の子孫で、石上神宮の最初の神主であった市川臣の神霊。その子・布留宿禰（ふるのすくね）が後に物部氏の支流を興した。